

シンガポール、マレーシア、香港における英語環境と英語教育支援
 —日本人の英語を考えるヒントとして—
 江藤裕之氏（東北大学大学院国際文化研究科 教授）

21世紀アジア学会大会 講演
 平成31年1月26日

江藤 裕之（えとう ひろゆき）

1963年 福岡県北九州市生まれ。

【学歴】

上智大学外国語学部英語学科卒業（1989年）。学部在籍中に
 ドイツ・ミュンスター大学に語学留学（1987～88年）。

上智大学大学院にて社会学（1992年）、
 英文学の修士課程を修了（1996年）後、
 アメリカ・ジョージタウン大学に留学（1996年～99年）。
 ジョージタウン大学よりPhD（2000年）、
 上智大学より博士（文学）取得（2002年）。

【職歴】

東北大学大学院国際文化研究科教授

【研究活動】

- ・ 西洋精神史・学問史の中の言語学史（1993年～）
- ・ 史的英語研究（1993年～）
- ・ 英語によるアカデミックライティング（2000年～）
- ・ 東アジアの英語と英語教育（2016年～）

【著書・訳書（抄）】

- ・ 『グローバル・エリート教育』（2016 PHP研究所）渡部昇一、平岡弘章との共著
 - ・ 『英文法のエッセンス』（2015大修館）単著
 - ・ 『質的研究をめぐる10のキークエスチョン』（2013医学書院）谷津裕子との共訳
 - ・ 『APA論文作成マニュアル』（*Publication Manual of the American Psychological Association*の邦訳）（2011医学書院）前田樹海、田中建彦との共訳。
 - ・ *Multiple Perspectives on English Philology and History of Linguistics*（2010 Peter Lang）織田哲司との共編
 - ・ 『看護・ことば・コンセプト』（2005文光堂）単著
- その他、共著本、論文等多数。



はじめに

1. シンガポールとマレーシアの英語環境
 2. 香港の大学における英語教育と英語学習支援
- おわりに——日本人の英語を考える

はじめに

英語は現代のlingua franca、すなわち世界の共通語 (common language) であり通商語 (trade language) であることは誰もが認めるであろう。英国人や米国人の言葉であるだけでなく、英語を母語としない人々の間で意思疎通を図る道具として、英語は国際補助言語 (international auxiliary language) の地位を揺るぎないものとしている。

もともとは北ドイツ地方の一方言に過ぎなかった英語が、中世ヨーロッパにおけるラテン語に匹敵するまでの、いやそれ以上の国際語にまでなった背景には、英語のもつ言語学的特徴の他に、さまざまな歴史的、地理的、社会的要因があるが、その解説はここでは述べない。¹

本稿では、英語が重要なコミュニケーションのツールとなっている東アジア地域、特に英語が公用語、あるいは準公用語として使われているシンガポール、マレーシア、香港に焦点を当て、英語が用いられる環境、第二言語としての英語教育、特に大学レベルにおける英語学習支援について報告をし、日本人の英語、英語教育を考える材料を提供したい。

1. シンガポールとマレーシアの英語

今日の世界で英語を母語として使っている国といえば、まずは、イギリス、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、カナダなどが思い浮かぶ。もっとも、カナダではフランス語も公用語として用いられ、アメリカの広い地域ではスペイン語が使われていることはよく知られている。また、ニュージーランドでは、英語の他に先住民の言葉であるマオリ語も共通語として大切にされている。英語を母語とするこれらの国々では、移民がそれぞれの民族グループの言葉 (母語) を守っており、政府もマイノリティーの言語を保護する政策を取っているという点が共通の現象として指摘される。しかし、いずれにしても英語が第一の言語であり、またその国民の多くにとって英語が母語であることは言うまでもない。

本名 (2003, p.14) によれば、世界193カ国のうち英語が実質的な公用語となっている国は50カ国 (準公用語や第二公用語としている国も含む) で、英語を通用語とする国は20カ国である。世界の4割に近い国において英語が主要な言語 (primary language) として使用されている。東アジアの多くの国や地域においても、英語は重要なコミュニケーションの道具であり、たとえば、

1 Cf. 渡部 (2001)、寺澤 (2008) などを参照。

ASEAN諸国の中ではシンガポール、マレーシア、フィリピン、ブルネイにおいて英語が公用語、ないしは準公用語として用いられている。ちなみに、ASEAN首脳会談では英語が唯一の共通語となっている。以下、東南アジア地域の言語状況、及び英語の使用状況について、シンガポールとマレーシアを例にとって説明したい。

1.1 シンガポールの英語環境

今日、東南アジア地域のみならず、アジア、いや世界でも有数の金融センターに発展したシンガポールは、1867年にイギリスの植民地となって以来、日本による占領期を除き、1963年にマレーシア連邦に参加するまでイギリスの支配下であった。そのため、シンガポールでは通用語としての英語の影響は大きい。

中華系、マレー系、インド系の民族から構成される多民族国家であるシンガポールは、1965年にマレーシア連邦より分離独立してから今日まで中国語、² マレー語、タミル語（南インド地方の言語）、そして英語をシンガポールの共通語としている。この4つの言語で「シンガポール共和国」を表すと次のようになる。

Republic of Singapore（英語）

新加坡共和国（中国語）

சிங்கப்பூர் குடியரசு（タミル語）

Republik Singapura（マレー語）

それぞれの民族グループの言語がシンガポール人の母語となっているのだが、どの民族言語にも属さない英語が政治・経済のみならず教育においてもシンガポールの第一言語としての地位を与えられている。それは、いずれかの民族グループの言語を公用語とすれば、他のグループの反発を招く恐れがあるからという理由による（本名, 2002, p.68）。

シンガポールの公教育の特色のひとつが、英語と母語（各民族グループの言語）によるバイリンガル教育であるが、実際は英語が重視され、小学校一年生から英語での授業がはじまる。1980年代以降、初等・中等教育において英語が第一言語、母語が第二言語と制定されたが、これは、シンガポールの独立と発展に寄与した初代首相リー・クアンユー（Lee Kuan Yew, 1923-2015）の指導力によるものである。

駅などの公共施設では英語、中国語、タミル語、マレー語の4つの言語で表示がなされ、紙幣・硬貨にもこの4言語で国名が記載されている。第一言語の英語を除く、残りの3つの言語には優劣はないことになっているが、そこには微妙な序列があるように思える。次ページの写真を見ていただきたい。「危険」を示す表示であるが、上から英語、中国語、タミル語、そしてマレー語となっ

2 以下、「中国語」と記載する場合は標準語（北京語、普通話）を指すものとする。

ている。人口比率で圧倒的に多く（約75%）、またシンガポールの政治・経済をリードしている中華系の人々の母語が実質的に序列二位となっているようだ。

英語を第一言語とする政策はシンガポールの経済発展の原動力となった。英語がメインのシンガポールの学校教育では英語の運用能力の高い人材を育成し、また、世界の共通語である英語が通じることで世界中から優秀な人材を引き付けてきた。しかし、先にも述べたように、シンガポールは長きにわたってイギリスの植民地であり、シングリッシュという独特の植民地英語が発達していた。シングリッシュとは、Singaporean English（シンガポールの英語）のSingとlishからできた混成語（blend）である。

ここでは、シングリッシュについて詳述しないが、³ 簡単に言えばシンガポールの土着語であるマレー語や中国語の方言（福建語、潮州語、広東語、客家語、海南語など）が混ざった英語である。たとえば、シングリッシュの大きな特徴のひとつに、OK, lah. やHurry up lah. のように語尾、文末にlah^{ラー}をつけることがあるが、これは福建語の影響とされる。また、This way can.（こっちに行ける）やCan./Cannot.（できる／できない）のようにcanを助動詞ではなく単体で用いたり、名詞（複数形）や動詞（人称変化）の変化語尾を省略したり、You are from Japan, aren't you? のaren't youの代わりにYou are from Japan, is it? のように付加疑問として常にis (isn't) itを普通に用いている（本名, 2002, p.79）。

こういったシングリッシュは、シンガポールの人々の間では十分に「通じる」英語であり、ラフな話し言葉としてコミュニケーションの手段としての役割を十分に果たしている。しかし、「正しい」英語としては認められず、教育の場では標準的な英語がベースになっている。2000年に入って、シンガポール政府は“Speak Good English Movement (SGEM)”を開始した。学校で「正しい」英語を教えて、できるだけシングリッシュを使わせないようにするという運動であり、そのウェブサイトには“Grammar rules matter.（文法のルールは大切）”という目立つリンクが張られていて興味深い。⁴

1.2 マレーシアの英語環境

マレーシアはマレー半島の大部分を占める西マレーシアとボルネオ島北部の東マレーシアからなる立憲君主制の連邦国家である。シンガポールと同じく、マレー系、中華系、インド系の民族から構成される多民族国家であるが、シンガポールと異なる点は、民族グループとしてマレー系が圧倒的に多く（約50%）、中華系（約30%）、インド系（約10%）がそれに続く。1971年からはじまった



3 詳しくは、本名（2002, pp.77-80; 2006, pp.79-85）を参照。

4 Cf. <https://www.goodenglish.org.sg/>

ブミプトラ政策によりマレー人は経済的に優遇され、⁵ 中華系の人々の歴史的な経済的優位に対抗してきた。

ポルトガル、オランダに続き、18世紀後半にマレー半島を植民地化したイギリスは、スズ鉱山、ゴム園の経営のために中国南部と南インドから多くの労働者を移住させた（本名，2002，p.259）。現在の多民族国家の起源はイギリスの植民地政策に翻弄された歴史の名残である。日本による占領期を経て、1957年にイギリスから独立しマラヤ連邦となり、1965年にシンガポールが分離し、現在のマレーシアとなる。

1957年のマラヤ連邦独立の際にマレー語が国語となったが、その後10年間は英語を公用語として残すことで、その間に政治、経済、文化、教育などにおいて、英語からマレー語にシフトさせようとした。1967年には「マレー語」を「マレーシア語（Bahasa Malaysia）」と命名し、唯一の公用語とした。学校教育では英語からマレーシア語へと変わり、1983年には初等・中等教育はすべてマレーシア語でなされるようになった（本名，2006，pp.71-72）。

現在のマレーシアの公教育では、公用語としてのマレーシア語、それぞれの民族語、そして英語が教えられている。たとえば、中華系マレーシア人はマレー語と母語（広東語、福建語、客家語など）、それに英語と中国語を学び、インド系マレーシア人はマレー語、タミル語、英語を学ぶ。

ビジネスの場では英語が多く用いられており、その意味で英語使用環境はシンガポールに近く、首都クアラルンプールのここ数年の劇的な発展はシンガポールを彷彿とさせるものがある。しかし、高等教育の場では両者は異なる。シンガポールの大学では英語による授業がほとんどであり、学内での事務伝達に使われる言葉も英語である。しかし、マレーシアの大学では基本的にマレーシア語が使われている。博士の学位請求論文もマレー語で書くことが多いようである。

このようにマレーシアではマレーシア語が圧倒的に優位であるが、日常生活の多くの場では英語も使用されている。広東語、福建語、客家語、タミル語、ベンガル語はそれぞれのエスニック・グ

ループが居住する区域ではよく用いられるが、マレーシア社会全体で用いられているとは言い難い。

この写真を比較してほしい。左側の写真は先に示したシンガポール市内で撮影した「危険」を示す看板の写真である。4つの言語で書かれ、上から英語、中国語、タミル語、マレー語となっている。



5 「ブミプトラ」とはサンスクリットで「土地の子」を意味する。つまり、地元民であるマレー人を指す。

それに対して、右側の写真は、同じく「危険」を示す注意の看板であるが、これはクアラルンプールにあるマラヤ大学にて撮影したものである。この場合の表記は上から、マレーシア語、英語、中国語、タミル語、そしてベンガル語となっている。一例に過ぎないが、シンガポールとは異なり、マレーシアではマレーシア語が一番優位の言語であることが見て取れる。

もう一枚の写真を見ていただこう。これは、クアラルンプール市内・近郊を走る電車の中の注意書きを撮影したものである。それぞれのイラストの下に、マレーシア語と英語が書かれている。マレーシア語はマレーシアの国語として、英語はマレーシア国内での通用語として、あるいは外国人観光客向けに記載されている。ところで、シンガポールはfine cityと揶揄されるように、⁶「～してはいけない」が多いが、マレーシアも似ている。右から3つ目のIndecent behavior (品のない行為)の禁止はマレーシアならではのであろうか、ユニークな禁止事項である。



シンガポール独特の英語をシングリッシュというように、マレーシアで用いられる英語をマングリッシュという。これも、Malaysian English (マレーシアの英語)のMaとnlishからできた混成語である。

マングリッシュはシングリッシュに似たところが多く、⁷語尾にlahをつけるところなどは共通している。また、動詞(人称変化)の変化語尾を省略したり、We go now, is it?のように付加疑問としてis (isn't) itを常に用いる点もシングリッシュに似ている(本名, 2002, p.268)。他にも、次のような例があるが(アスピナル, 2000)、イタリック体の部分が標準的な英語文法から見ると破格の用法である([]内は標準的な英語での言い換え)。

How can? [It's unbelievable.]

He say only. [He's all talk.]

6 Singapore is a fine city. あるいはSingapore is a fine countryと言われるが、ここのfineは「素敵な」という意味と「罰金」という意味をかけた洒落である。公共の場での喫煙、ごみのポイ捨てやつばを吐くこと、そしてガムを噛むことなどがシンガポールでは禁止されており、違反すると高額の罰金(だいたい1,000シンガポールドル [約80,000円])が課されている。

7 詳しくは、本名(2002, pp.267-270; 2006, pp.73-77)を参照。

Can you *borrow* me a pen. [Can you *lend* me a pen?]
 I went there *by walk*. [I went there on foot.]
 I've *finished* money. [I've run out of money.]
Papaya also *got*. [We also have papaya.]
 You've *gone down*. [You've lost weight.]
 I'm *frus* today. [I'm a little frustrated today.]
 Can you *off* the computer? [Can you turn off the computer?]

シングリッシュと同じく、マングリッシュも口頭でのコミュニケーションのための実利的な英語であって、書き言葉としては認められない。上述したように、シンガポールでは政府主導により、「正しい英語 (good English)」を学ぶ機会が奨励されている。その意味で、恒常的に英語を使用しているシンガポール人に比べて、マレーシア人の英語運用能力は低下しているという指摘は否めない。その危機感からか、政府は国民の英語力を向上させ、マレーシアの国際競争力を高めるために、新たな英語教育政策を打ち出している (本名, 2002, pp.270-271; 2006, p.78)。

2. 香港の大学における英語教育と英語学習支援⁸

以上、シンガポールとマレーシアの英語使用環境についてみてきた。双方とも、歴史的に英語とのかかわりが強く、また多民族国家であるがゆえに、それぞれの民族グループの母語に加え、通用語として英語が用いられている点が共通している。しかし、マレーシア語を国語としているマレーシアでは、シンガポールと比べると、英語を使用する環境が少し異なることが見えてきた。では、ここで、東アジア圏で英語がよく使われているという印象の大きい香港における英語の使用環境、そして香港の大学での英語教育、特に英語学習支援についての調査結果を報告したい。

数年前のことであるが、香港のある大学を訪問したときに、学部生の英語教育の担当教員から、近年、香港の学生の英語運用能力、特にライティングの能力が落ちていること、そのために大学として授業外に学生が自由に利用できる英語学習センターやインターネットを利用した補助学習を開発し、その拡充を図っていることを聞いた。香港といえば、かつての英領で、また、シンガポールと並んでアジア屈指の国際金融都市でもあり、英語がふつうに使われている印象があったため、最初にこの話を聞いたときは信じがたいものであった。しかし、実際のところ、今日の香港では外国人が利用するホテルやレストランなどの施設や観光スポットを除いて英語は意外に通じない。それでも、香港の大学では英語が公用語 (あるいは公用語の1つ) として用いられていることから、香

8 本章は、東北大学高度教養教育・学生支援機構から、2016～2018年度高度教養教育開発推進事業の助成を受けて実施した調査研究報告 (「東アジアの準英語圏・非英語圏における英語学習サポートシステムの実態調査—その経過と香港地域の大学の調査結果を中心に—」東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 4: 415-426) に加筆修正を加えたものである。したがって、本章で用いた数値などは特に記載のない限り2017年2月の調査結果をベースにしている。

港の大学生は英語に苦労しないのではないかと思っていたのだが、中国への返還後20年近く経過した現在、状況はずいぶんと変化したようである。

香港の大学では、今日でも、授業、課題・試験、教員とのコミュニケーション、必要な事務連絡はほぼ英語で行われている。伝統的な中国の学問を重んじる香港中文大学では中国語も使用するが、大学では総じて英語が通用語として用いられる。しかし、約8割の学生の母語は広東語で、英語は第二言語である。したがって、学生にとっては、友人との会話、家族との会話など、キャンパスの外では広東語を話すため、英語を使う頻度は激減するのだそうである。返還後は、大陸との行き来や人口流入も多くなり、その人々は英語をよく解さない。また、中国政府の方針で香港の小中高では標準中国語を教え、その使用頻度も多くなってきたようである。

このような状況では、香港といえども、大学生の英語力は以前に比べて下がってきているようで、その教員は、英語だけでなく大学そのもののレベルがシンガポールの大学に大きく負けてしまうと嘆いていた。東京ではなく、アジアで似た状況にあるシンガポールの大学（シンガポール国立大学、南洋理工大学など）をライバル視しているところが印象的であった。

学生の英語運用能力について問題を抱えているのはわが国だけでなく、英語が恒常的に使われている印象のある香港の大学でも同じであることを知った。さらに、香港の大学生も英語を第二言語として努力して「学んでいる」ことを知った。そこで、香港の大学における英語教育制度、特に学生の英語学習のサポートシステムの取り組みを詳しく調べ、その内容を吟味することで、わが国の大学における英語指導に参考となる点を見出すことができるのではないかと考えた。

2.1 香港の大学生の英語環境と香港の大学における英語学習支援

特色ある英語教育を実践している香港の大学に関する事前調査から得た情報をもとに平成29年2月7日～9日に香港理工大学、香港中文大学、香港城市大学、香港科技大学の4大学を訪問した。各大学において、英語教育の責任者に、教養課程の英語カリキュラムの理念と方法、各大学が抱える英語教育の問題点とその対応策についてのヒアリング調査を行い、英語学習支援システムについて、英語（外国語）学習センターなどの関連施設を見学した。訪問先の詳細は下表の通りである。

大学名	英語教育担当部局	自学自習センター
香港理工大学 The Hong Kong Polytechnic University	English Language Centre (ELC)	Centre for Independent Language Learning (CILL)
香港中文大学 Chinese University of Hong Kong	English Language Teaching Unit (ELTU)	The Independent Learning Centre (ILC)
香港城市大学 City University of Hong Kong	English Language Centre (ELC)	Self-Access Centre (SAC)
香港科技大学 Hong Kong University of Science and Technology	Centre for Language Education (CLE)	Language Commons (LC)

2.1.1 香港理工大学／CILL

香港理工大学（The Hong Kong Polytechnic University：PolyU）は、1937年にGovernment Trade Schoolとして創設され、1994年に現在の名称となった公立の総合大学である。8つの学部から構成され、2,600名近い常勤スタッフと約28,000名の学生を擁し（2016年時点）、香港の大学では最大の学生数を誇る、街の中心部に位置する都市型大学である。⁹

学部生の英語教育は人文学部（Faculty of Humanities）所属の英語センター（English Language Centre：ELC）が担当し、英語教育、英語教授法、応用言語学を専門とする120名程のスタッフが、カリキュラム作成、指導法の開発、授業を実施している。なお、大学院レベルのアカデミックイングリッシュ教育（プレゼンテーションスキル、論文執筆も含む）もELCが担当している。そのミッションは、①学生のコミュニケーションスキルを高め、研究者、専門職者として優秀な人材を育成すること、②学生の自立した生涯にわたる英語学習を推進すること、③大学だけでなく、香港の人々全般の英語運用能力推進のための支援をすることである。¹⁰

香港理工大学にはELC附属のCentre for Independent Language Learning（CILL）という英語自習センターがある（右の写真はCILL

内部の様子）。後で詳述するが、ここでは、TOEFL、TOEIC、IELTSなどの資格試験対策、アカデミックライティングなどの英語学習に関するさまざまな情報の提供の他に、英語図書、視聴覚教材の貸し出し、ミニレッスン、セミナーを開催している。



2.1.2 香港中文大学／ILC

香港大学、香港科技大学と並んで、香港を代表する大学である香港中文大学（Chinese University of Hong Kong）は1963年に設立された香港の公立大学で、コロニアル風の趣のある香港大学に対して中国の伝統文化をも教授することから「中文」という名称を冠している。そのため、大学では英語の他に中国語による授業も行われ、中国学センター（Centre of China Studies）もある。香港郊外の広大なキャンパスに8つの学部、約8,000名のスタッフのもと、約20,000名の学生が学ぶ。なお、香港中文大学は、オックスフォード大学やケンブリッジ大学と同じカレッジシステムを採っている。¹¹

学部の英語教育は、英語教育ユニット（English Language Teaching Unit：ELTU）に所属する60名のスタッフ（40名の常勤スタッフ、20名の非常勤スタッフ）が担当し、学生はEnglish for

9 Cf. <https://www.polyu.edu.hk/web/en/home/index.html>

10 Cf. <https://elc.polyu.edu.hk>

11 Cf. <http://www.cuhk.edu.hk/english>

Academic Purposes (EAP)、English for Specific Purposes (ESP)、English for Professional Purposes (EPP) を組み合わせた4段階(合計9単位)の英語授業を履修する。¹²

下の写真は、ELTUのスタッフが管理・運営するIndependent Learning Centre (ILC) であるが、そこでは、英語学習、ならびにIELTS、TOEFL、TOEICなどの試験対策へのさまざまな資料の提供だけでなく、大学での研究スキルや論文作成のミニレッスン、セミナーなどの開催や、インターネットを利用したサポートが行われている。



そういったセミナーには、

Independent learning

Study skills at university

Academic reading

Active listening

Discussion and presentation skills

Effective writing

Critical thinking skills

などの多岐にわたるテーマが設定されている。また、英語の自学自習支援のためのe-learningにも力を入れており、コンピューター専門の専任スタッフもいる。なお、ILCは英語のみならず、中国語(普通話)の学習支援も積極的に行っている。

2.1.3 香港城市大学/SAC

香港城市大学(City University of Hong Kong: CityU)は1994年に設立された、4つのcollegeと4つのschoolを有する比較的新しい香港の公立大学である。名が示す通り、香港市内の中心部に位置する香港理工大学と同じく都市型の大学である。¹³ ここでの学部の英語教育は、English Language Centre(正式名称はChan Feng Men-ling Chan Shuk-lin English Language Centre:

12 Cf. <http://eltu.cuhk.edu.hk/>

13 Cf. <http://www.cityu.edu.hk/>

ELC) のスタッフが担当している。¹⁴

英語の学習サポートシステムはEnglish Language Support Services (ELSS) と呼ばれ、通常の授業ではカバーできない内容について、学生が卒業するまでの広範囲にわたる英語学習の支援を行っている。¹⁵ 内容としては、香港の大学生に重要な意味をもつIELTSのスコアアップのためのミニレッスン、プレゼンテーションスキル、ライティング、発音、スピーチのセミナー、インターネットによる英語学習プログラムの作成と配信、学生が自由に利用できるSelf-Access Centre (SAC) の運営がある。

SACは平日の10:00~20:00の間オープンしており、右の写真にあるような自習スペースがあり、豊富に揃えられている英語の教科書、参考書、辞書、副読本、視聴覚教材を自由に利用することができる。また、エッセイの書き方、英文法で犯しやすいミス、語彙の増やし方などの、教員手作りのテーマ別Worksheetも無料で配布されている。



今回訪問した他の大学と異なり、香港城市大学のELCでは自学自習 (Independent learning) を授業に組み込んでいる。その内容は、CALLやICOSA¹⁶などのオンラインネットワークを使用した自学自習が6時間、IETLSやライティングのセミナーなどへの参加が6時間、合計12時間の自主学習が単位取得の条件となっている。

また、ELC内のフリールームにて留学生を積極的に活用したChat Groupsなどの課外活動を行っている。これは予約なしで参加可能な英語による自由な会話クラブで、50分程度であるが、学期中ほぼ毎日行われている。なお、Chat Groupに協力する留学生は必ずしも英語母語話者ではないが、ティーチング・アシスタントとして賃金が支払われている。その他にもHelp-deskがあって学生の相談にのっている。

2.1.4 香港科技大学/LC

1991年設立の香港科技大学 (The Hong Kong University of Science and Technology) は、香港郊外に位置する公立大学である。科技大学という名称であるが、人文社会系の学部も有する総合大学で、そのビジネススクールは世界でもトップクラスである。4つのschoolと学際プログラムオフ

14 Cf. <http://www.cityu.edu.hk/elc/>

15 Cf. <http://elss.elc.cityu.edu.hk/ELSS/home.aspx>

16 ICOSAは香港教育大学、香港城市大学、香港浸會大学、香港理工大学、嶺南大学が共同開発したオンライン英語学習システムInter-institutional Collaborative Online Self-Access Projectの略。Cf. <http://icosa.hkbu.edu.hk/>

イスからなり、約20,000名の学生と700名の専任教員を有している。¹⁷

ここには、2012年に創設された人文社会学部所属のCentre for Language Education (CLE) という部局があり、学部生、大学院生の語学教育の担当、外国語の学習支援のみだけでなく、教員の語学支援も行っている（教員の場合は中国語のみ）。英語の専任スタッフは70名、中国語は20名である。英語と中国語が中心となるが、第3外国語としてヨーロッパ系、アジア系の言語、またラテン語、ギリシャ語も扱っている。¹⁸

CLEは、英語と中国語を中心にした語学の自学サポートシステムとして、The Informal Curriculum for Language Learning (iLANG) を提供し、学生が通常の授業ではカバーできないスキルの習得をサポートしている。英語学習に関するさまざまなミニレッスンやセミナー、Chat-cornerを開催するほか、オンライン上での外国語学習も提供している。そ



の他、学生が自由に利用できるLanguage Commons (LC) もあり（上の写真）、スタッフが常駐し、他の大学と同様に、英語・中国語学習のための参考書、試験対策本、副読本、視聴覚教材を十分に揃えている。

2.2 香港の大学における英語教育の位置づけ

以上、香港の4つの大学の英語教育制度、英語の自学自習支援システムについて概要をしたが、内容的に重なっている点が多い。その理由のひとつとして、上記の大学の英語スタッフは（他の大学も含め）定期的に会合を重ね、意見交換・情報交換や共同作業を行っているからである。この調査から香港の大学における英語学習を取り巻く状況、英語学習サポートシステムについての情報をまとめると次のようになる。

- ・香港の大学では授業、及び事務連絡で英語を使用することが多いが、大部分の学生の母語は広東語であり、英語はあくまでも第二言語として位置づけられている。その他にも、標準中国語の習得が義務付けられている。
- ・学生は香港での就職のためにIELTSでの高得点（6.5～7.0 → イギリスの大学院入学レベル）が期待されている。
- ・大学における英語教育は、全学レベルではEAP、各学部レベルではESPに重点が置かれている。
- ・英語クラスはどの大学でも1クラス20名前後で、専属スタッフ（常勤、非常勤）が担当する。

17 Cf. <http://www.ust.hk/>

18 Cf. <http://cle.ust.hk/>

- ・英語担当スタッフの国籍は様々で、World Englishesを認めているものの、書き言葉としては標準的な英語を教授する。
- ・代表的な学術論文作成マニュアルとしては*Publication Manual of the American Psychological Association* (APA)、*MLA Handbook for Writing Research Papers* (MLA) などが指定されている。

2.3 香港の大学における英語学習支援

各大学とも英語の自学自習 (independent learning) のためのオンライン学習環境 (e-learning)、学習施設 (Self-access Learning Centreなど)、ミニレッスン、セミナーなど、かなり充実したサービスを提供している。また、上述したように、香港城市大学では、この自学自習制度を単位取得の条件としていたり、留学生を積極的に活用したChat Groupsなどの課外活動を積極的に行っている大学もある。

以上の内容をまとめると下記の表のようになる。

	香港理工大学	香港中文大学	香港城市大学	香港科技大学
学習スペース	✓	✓	✓	✓
パソコン	✓	✓	✓	✓
サロン、グループ学習、ゲーム	✓		✓	✓
参考図書、レファレンス	✓	✓	✓	✓
新聞、雑誌	✓	✓	✓	✓
DVD	✓	✓	✓	✓
Worksheet	✓		✓	
個別指導	✓	✓	✓	✓
ミニレッスン、セミナー	✓	✓	✓	✓
留学生による活動			✓	
自学自習が単位取得の条件			✓	
独自のウェブサイトの開発、更新	✓	✓	✓	✓
英語以外の言語	✓	✓	✓	✓
専属スタッフ	✓	✓	✓	✓

上述したように、これら4大学はいずれも英語学習サポートシステムの充実度については大きな差はない。そこで、内容的に重なる部分が多いので、自学学習スペースが比較的充実していた香港理工大学のCentre for Independent Language Learning (CILL) を取り上げ、その内容を詳しく紹介しよう。

2.4 香港理工大学Centre for Independent Language Learning (CILL)

2.4.1 概要

CILLについて、その公式パンフレットには次のように記載されている。

CILL is a self-access language learning centre, where you study by yourself, or with a group of friends. Qualified, experienced PolyU teachers offer you guidance, and are always happy to answer your questions. We help you acquire useful language learning skills to enrich your academic life at PolyU.

つまり、CILLは学生が一人で、あるいはグループで自主的に外国語を学習する場である。そこは単なる空間の提供だけではなく、さまざまな情報が提供され、資料が整備され、質問コーナーが設置され、セミナーが開催されている。英語に関するものがほとんどだが、中国語、及びその他の外国語についての書籍も若干ある。

CILLが提供する主なサービスは次の通りである。

Speaking Assistance Programme

Writing Assistance Programme

Help Desk

Learning Pathways

Certificate Award Scheme

Seminar Series

Cultural Materials Corner

Movies for Language Learning

Books for the Month

English Book Fair

CILL tour

特に、アウトプット (speaking、writing、presentation) 能力向上についてはさまざまなセミナーを開催する他、個人的な質問や相談を受け付けている。

次に、CILL内で閲覧、貸出が可能な資料であるが、下記のように記載されている。

Language learning materials (English and other languages)

Language learning videos

Magazines and newspapers

Movies and TV programmes

Multimedia programmes

Practice examination materials (English and Putonghua)

Presentation room for booking

2.4.2 サービスの詳細

では、香港理工大学における以上のサービスと資料について詳しく見ていこう。CILLの開館時間は平日9:30~20:00で、週末は土曜日のみ9:00~12:00となっている。香港理工大学は香港の中心部に位置する都市型の大学で、その地の利を活かした社会人対象のコースも多く設けられており、図書館は24時間オープンしている。CILLは資料の閲覧や貸し出し、セミナーやさまざまなアシストを受けるだけでなく、学生が自由に自学自習に使える場でもある。

閲覧可能な資料としては、右の写真のように、辞書、文法書、ライティング関連の参考書・マニュアル本、語彙増強の本、副読本としての最新のペーパーバックが開架式の書棚に並べてある。英語の書籍が中心であるが、次に中国語の書籍が多く、あとはフランス語、ドイツ語、スペイン語、日本語などの本が並んでいる。



新聞・雑誌も充実している。新聞はInternational New York Times、The Straits Times（シンガポール）などの他にSouth China Morning Postなどの地元のアングロ新聞も閲覧可能となっている。雑誌はTIME、The Economist、Fortune、The National Geographicなど、英語圏でも一般読者向けの雑誌が用意されている。こういった新聞・雑誌は図書館でも読むことができるが、CILLにおいても提供され、学生は自由に読むことができる。



香港では就職の際に英語力、とりわけIELTSのスコアが重視されていることは先に述べた。そのため、香港理工大学をはじめとする香港の大学ではIELTSなどの英語資格試験の対策に力を入れている。そのため、CILLでは、IELTSをはじめ、ケンブリッジ英語検定、TOEFL、TOEIC、GMAT、GREなど、イギリス、アメリカの大学への入学の際に要求される英語資格試験、共通試験の問題集、参考書、対策本が充実している。こういったテキストの閲覧や貸し出しの他にも、イギリス、アメリカへの留学を志す学生の英語力増進を支援するために、IELTSやTOEFLのスコアアップを目指したセミナーが開催されている。

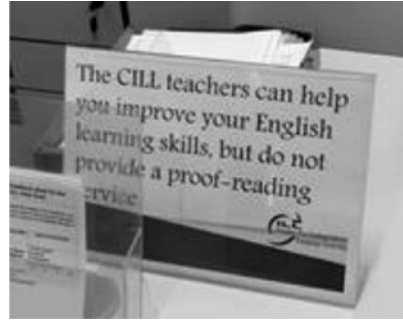
視聴覚教材としては、IELTSやTOEFLのリスニング問題対策の参考書や教材用CDの他に、映画

やテレビドラマシリーズのDVDも用意され、CILL内で鑑賞できるようになっている。こういったDVDは娯楽として鑑賞するのではなく、英語や英語圏文化を知るための学習として視聴することが学生に求められており、そのためにCILL所属の教員が、それぞれのDVD作品について詳細な解説を作成し、学生の学習の便宜を図っている。その内容は、映画の内容の解説（文化的背景や扱っているテーマの鑑賞のポイント）、重要な英語表現、部分的なトランスクリプトであり、映画のタイトル毎にファイルにまとめられている。学生は、この資料を参考にして、映画やテレビドラマシリーズの概要を理解するだけでなく、さまざまな英語表現を学び、自身の英語運用能力増強につなげている。



CILLには資料閲覧や自習用のテーブル、DVDを見るためのパソコンが設置されたブース、学生どうし、あるいは学生とチューターの談話スペース（ソファが数脚置かれていて、CNNなどの英語ニュースを常時流しているモニターがある区画）の他に、上の写真のような小さな部屋がいくつか準備されている。たとえば、CILL Teaching Roomでは、CILLスタッフが個別に学生の相談に応じたり、小さなグループでの学習セッションやミニレッスンが行われる。事前の予約が必要であり、使用頻度も限られているが、すべての学生にオープンである。

それ以外にも、個別の訓練に特化した部屋もある。CILLが提供するサービスの中に、Speaking Assistance Programme、Writing Assistance Programmeが挙げられていたが、英語のスピーキング及びライティング指導の部屋が確保されている。それは、この2つのスキルに関するアシストに学生の需要が集中するからである。こちらも事前の予約が必要で、また回数の制限もある。プレゼンテーションの予行演習を目的とした部屋もあり、ここには必要な機材（スクリーン、プロジェクター）の他に、プレゼンテーションを録画して確認するための機材（ビデオカメラ、デスク、モニター）も用意されている。この部屋は学生が単独でも使用できるが、チューターの前で模擬プレゼ



ンテーションを行い、アドバイスを受けることもできる。

CILLでは、English Reading Clubや各種ミニレッスン、セミナーを開催し、学生の英語スキルアップを応援している。こういったセミナーは、単に英語運用能力を強化するだけではなく、就職に有利なスキルも学べる場となる。また、CILLでは英語の4技能、プレゼンテーションスキル向上のポイント、参考になるURLを掲載したインフォメーションシートや、Listening、Speaking、Reading、Writing、Pronunciation、Grammarのワークシートも無料で配布している（上の写真）。ヘルプデスクでは、CILL所属の教員がさまざまな質問に答えてくれるが、上の右側の写真にあるように英文のチェックや校正は受け付けない。

最後にCILLのウェブサイトを紹介したい。¹⁹ このウェブサイトから、ELC/CILLが提供するさまざまなサービスの最新情報にアクセスすることができる。また、Speaking Assistance Programme (SAP) と Writing Assistance Programme (WAP) の予約をすることができ、Dictionary、Grammar、Listening、Presentations、Pronunciation、Reading、Speaking、Vocabulary、Writingなどの英語学習に便利な情報や自学自習のためのページにアクセスできる。

19 Cf. <https://elc.polyu.edu.hk/cill/>

たとえば、Dictionaryをクリックすると、オンライン上の各種辞書が使用できる。Writingでは、メモ、E-mail、手紙、エッセイ、レポートの基本的な書き方から、論文の参考文献一覧の作成法、アイデアのまとめ方、プランなどが細かく説明されている。また、それぞれのトピックに関してさらに情報を得たい学生のために、関連するウェブサイトへのリンクが張り付けられている。また、The Writing and Reading Requirementsというページでは、Learning videoを視聴することができる（視聴したいテーマをクリックすると、YouTubeにジャンプする）。なお、このウェブサイトのコンテンツ、及び200本以上のビデオクリップはすべてELCの教員の作成によるものである。

香港理工大学のみならず、本稿で紹介したいいずれの大学も、自学自習のためのウェブサイトは非常に充実している。SACなどの自習スペースの確保や対面式のサポートも重視する一方で、時間と場所を選ばない学習が可能なe-learningに力を入れている。しかし、そのコンテンツはアウトソーシングするのではなく、あくまでも学生を直に知っている教員たち自らが協力しあい作り上げてきたものである。そして、こういったサイトは大学外にも公開し、誰でもアクセスが可能である（大学によっては一部の内容には学外者はアクセス不可となっている）。

3. おわりに—日本人の英語を考える

以上、前半はシンガポール、マレーシアの英語使用環境について、後半は香港理工大学を中心に、香港の4つの大学における英語学習支援についての調査結果を報告した。そこから得た知見としては、シンガポール、マレーシアのような、われわれの印象からすると英語が十分に「通じる」国において、現地語がミックスされた英語が話され、政府は標準的な「正しい」英語を学習させる教育政策をとっていることや、香港のように英語をふだんから使っているように思える国際都市であっても意識的に英語を勉強しなければ、英語を使えるようにはなれないということであった。

シンガポールとマレーシアの事例からは、「話す英語」としてはシングリッシュやマングリッシュといった多様な英語が受け入れられても、「書く英語」としては標準的な英語でなければならないということがわかる。世界を見渡しても、話し言葉においては、必ずしもイギリス人やアメリカ人のように話す必要はなく、世界の英語（world Englishes）を認めようという空気はたしかに存在する。

主として商売上のコミュニケーションの道具として英語と現地の言語が混合したものをピジン英語（pidgin English）という。²⁰「お久しぶりです」を意味するLong time no see. という英語の表現があるが、これはまさにピジン英語である。正しくはIt's been a while. だとか、It's been such a long time since I saw you last. などとなるが、Long time no see. は英語として破格であるとしても、母語話者にも使われる。これは、「好久不見」という中国語の漢字一字一字をそのまま英語に置き換えたものであるという。しかし、これはこれで通じる。黙っているよりは、「文法・語法なんかいいから、とにかく話してみる」方がよいこともあろう。

20 このpidginはbusinessがなまってできた語である。

しかし、英語を書くときにも文法を考えなくてもいいだろうか。Long time no see式の英語で十分だろうか。「マイクは3時にここに来ます」は英語でMike is coming here at three o'clock. となる。しかし、話し言葉では、Mike coming here threeで十分「通じる」し、atなどの機能語に強勢を置くことはない。話し言葉では大切な語が強く、大きく、長く発声されるが、書き言葉はすべての語が同じ大ききで書かれる。時刻を表す時にどの前置詞を使ってよいのかわからなければ、話すときはそれを言わなくともさほどの問題ではない、しかし、書き言葉では、

Mike is coming here three o'clock. (atを書かない)

Mike is coming here at/on/in three o'clock. (迷ってしまい、知っている前置詞を並べる)

Mike is coming here at three o'clock. (自信がないのでatを小さく書く)

というのはいずれも適切でない。つまり、「話す英語」と「書く英語」、そして「通じる英語」と「正しい英語」は分けて考えなくてはならない。

「とにかく話してみよう」ということであれば、いろいろな英語 (Englishes) に触れてみることは私たちに勇気を与えてくれる。私たち日本人の多くは英語、それも英語を話すことに苦手意識を持っている。それをなくすには、シングリッシュやマングリッシュのように完璧な英語でなくとも通じるのだと知ることで、²¹ 英語学習のモチベーションを高めていくことにつながるだろう。

日本人が英語を苦手に思う理由として、完璧を好む国民性や、これまでの日本の英語 (外国語) 教育では正確な読み書きを目標にしてきたことがあるが、そもそも、日本で生きている限り英語は必要ない。高等教育においてさえ、1890年代以降は日本語で教育研究を行うことができる。今日、大学での「英語化」が流行しているが、自然科学の分野でノーベル賞受賞者を出す大学でも、母語 (日本語) のみで卒業できることは私たちの誇りであることを強調しておきたい。

しかし、インターネットの普及やグローバル化の進展により、わが国においても英語を取り巻くパラダイムは大きく変わりつつある。英語ができなくても問題なく生きてはいけるものの、英語ができれば世界が広がり、また情報の収集・発信に極めて有利である。したがって、私たちは自分のニーズに合わせて、自分で学習法を考えて英語を勉強しなければならない。その時に、シンガポール英語やマレーシア英語の存在や、香港の学生でさえ英語を習得するために不断の努力をしていることを知ることは、私たちの英語学習への姿勢を変えるきっかけとなろう。

ヒト、モノ、カネが自由に国境を越え、その動きが地球的規模で拡大していく今日、専門分野を問わず、このグローバル化時代に活躍するには、説明力、交渉力といったコミュニケーションの手

21 人気タレントの出川哲郎氏や、少し古いところではルー大柴氏のかなり破格の英語 (デガワ・イングリッシュ、ルー語・ちょいグリッシュ) でも、何かを英語 (らしきもの) で話しているという姿勢は相手に伝わり、こちらの言いたいことを理解しようとしてくれる。会話 (対話) には相手がいいて、理解しようとしてくれる。しかし、書き言葉はそうはいかないので、ルールをしっかり守って文章を書く必要がある。

段としての語学力、すなわち英語の実践的運用能力が挙げられる。わが国においても、大学の英語教育において、いわゆる4技能を發展させた実践的・即戦力的な英語運用能力を学生に習得させること——とりわけ、英語による発信力（スピーキング、ライティング、プレゼンテーション能力）の強化——が期待されている。

しかし、入試が終わり、日常生活では英語を使用する必然性がほとんどない英語学習のインセンティブに欠ける状況で、大学における英語授業の履修時間数も極端に限られていては、その期待に応えることは容易ではない。このような状況で学生の実践的英語運用能力を維持、發展させていくには、効率のよい授業カリキュラムの開発、教材・教授法の開発、教員の教育力強化も重要であるが、それにもまして学生の英語自学学習への支援を充実させていかななくてはならない。その中で、英語学習に対する学生自身のモチベーションを高め、授業外の英語学習時間を確保し、その時間を有効活用して学生個人による英語学習を習慣化させていくことが重要になってくる。

その際に、どのような形で学習の機会と方法を与えるか、学生のモチベーションを向上させるような自学自習プログラムはどのようなものかについて、香港の大学が実践している対面式手法（ミニレッスン、セミナー、個人面談）やオンライン学習環境（独自のウェブサイトの整備）などの情報は今後のわが国における英語教育全般の改善に大きな示唆を与えてくれるものと思う。英語学習のモチベーションを高めるには、今はまさにLook east! の時代なのかもしれない。

引用文献

- アスピナル・ジョン. (2000). 『マレーシア英語のは・て・な?』クアラルンプール: CEM ASIA SDN. BHD.
寺澤盾. (2008). 『英語の歴史 過去から未来への物語』東京: 中央公論新社.
本名信之編・著. (2002). 『【事典】アジアの最新英語事情』東京: 大修館.
本名信之. (2003). 『世界の英語を歩く』東京: 集英社.
本名信之. (2006). 『英語はアジアを結ぶ』東京: 玉川大学出版部.
渡部昇一. (2001). 『講談 英語の歴史』東京: PHP研究所.